

榎ノ木

第六号

平成25年3月11日発行

青壮年部女性部広報

題字：大内翠峰

女性部活動全国紙に掲載！

昨年11月18日に開催された『樹木葬・東日本大震災被災地慰霊移動研修会』を特集します。



花園会青壮年部・女性部の発足（禪興寺）



梅澤徹玄住職（前列左端）と女性部で参拝も

め教しみなにに生う職

する教化組織「花園会」が、女性部、青壮年部及び少年少女部その他の部会を組織する」と規程が定められている。実は禪興寺にも以前から花園会はあったという。あえて新組織にしたのは、なぜなのか。

「先代は中絶した。行事は五月の子育てみで、またこのあたりは白お墓も分散する共同墓地。足を運ばれるのは人が亡くなったのです」と振り返る。

当山花園会活動が全国紙寺院実務月刊誌「寺門興隆」の正月号に大きく記載されました。

「人々が生きているうちに来られるお寺にしたい、みんなで作る学び、みんなのお寺にしたい」

仏教の教えを広めるために三弘（降誕会、成道会、涅槃会）は必ず行い、生きている私たちのための宗教となるよう、日常的なお寺の活動を支える組織が必要との住職の予てからの想いが発端となり、平成二十二年に新組織臨済宗妙心寺派禪興寺花園会青壮年部・女性部が、結成されました。

地元檀家百五十名が会員として参加、うち半数が「女性部」。成道会、施餓鬼会、などの行事の際に精進弁当作り、広報誌の発行、写経会、抹茶と法話会、移動研修会と、様々な活発な活動を実施している寺と、全国で紹介されました。

お寺を支える様々な活動の中で「人生の教えや心の支えを仏教から少しでも学び取ってもらえたら」という住職の想いのもと、檀家の間では「お寺は敷居が高いと思っていたが印象が変わった」とうれしい声も出ているとのこと、団塊世代が

定年を迎え、第二の人生を歩む時代。自然豊かなこの地に暮らす檀家の一人ひとりが、将来的には都市部の方々との交流を図る受け皿になれば、と徹玄住職は期待を込められた。

青壮年部・女性部が結成されて三年目。この間のひとつひとつの活動が次から次へと波及し、様々な方面に展開しつつあることを、檀信徒の皆さんも身をもって体験してきていると思います。

これを機会に、会員はじめ檀信徒の一人でも多くの方が、積極的に行事へ参加され、心の英気を蓄えていただくようお願いしません。



住職・お寺の専門誌

『寺門興隆』発行 興山舎

東京都港区芝大門1-3-6
☎03(5402)6601

<http://www.kohzansha.com/>

毎月1回1日発行

定価1,155円

日本初の樹木葬 知勝院

昨年11月18日、「樹木葬・東日本大震災被災地慰霊・移動研修」が行われました。

岩手県一関市に、日本で最初の「樹木葬」墓地があります。知勝院というお寺が管理するこの墓地は、死んだ後は、土に還りたいと願う人々の思いを叶える場所です。知勝院の樹木葬は、まず、墓所の使用権の契約をします。埋葬時には、深さ約1メートルの穴を掘り、そこに遺骨を直接、安置して土を被せます。墓標は立てず、かわりに、地域の環境に合った低木を植えます。ヤマツツジ、ウメモドキなど花や実が楽しめる低木の中から、契約者が選べるようになっています。

墓所に囲いはなく、自然の中にとけ込む墓地の中を歩くと広々として明るい林であることに驚きました。基準点や基準木を定めて場所を特定できるので、埋葬場所がわからなくなったり、お隣と重なってしまふ心配はありません。よく見るとお名前を記した木の札があちこちに立っていますが、自然の中にとけ込んで、ほとんど目立ちません。

樹木葬墓地を作ることによって自然豊かな里山を出来るだけ本来の自然に近くなるような景観づくりの取り組みが続けられていました。



辺りは野草の宝庫でした。



ところどころにある墓標

一関・樹木葬研修をおえて

沢渡 早坂 妙子

本年11月18日(日)一関知勝院(樹木葬)見学をさせていただきました。

最初樹木と聞いて、高い山がありぼつん、ぼつんとひとりひとりあるのかと想像していましたが、実際見学して山は山でも林の所を整備し、山での自然な感じであった。

そこには珍しい草や花が生えており、また、この辺りでは見られない昆虫などもいるそうです。故人が好きな木などを選び植えていくそうです。

人は自然に還ると言いますが、まさにこのことなんだと実感しました。

私達の子供も、子供がいない人ももちろんの事、家や墓を守るのは難しくなる時代がやってくるでしょう。今、まさに感じるころである。



防災対策庁舎にて

移動研修に参加して

山形県大童市 庄子 則男

京子

この度の参加につきましては、いすれ実家の墓を守る者が居なくなることや私たちの墓地はどうしたものかと最近考えることが多くなっていたところにご案内を頂き、迷うことなく参加しました。樹木葬についてはよく知りませんでしたが、とても興味深いものがありました。知勝院の先住職様の、自然の大切さ、生物植物を思う心に触れ、今の生活が当たり前と、何も考えず日々過ごして来た事を反省させられました。

また、東日本大震災につきましては、当時新聞を見ては涙する日々でしたが、今回研修でその被災地を訪れ、手を合わせる機会を頂き感謝しております。

車中のご住職様からの被災当時の様子を色々とお説明いただき改めて想像以上だったことを実感いたしました。この度の研修旅行はとても充実した一日でした。

ご住職様はじめ一緒させていただいた皆様に大変お世話になりました。ありがとうございます。



地福寺の復興支援グッズを手に



地福寺片山住職を囲んで集合写真

被災地にて想つ

「気仙沼市波路上地区、南三陸町防災対策庁舎、石巻河北大川小学校」

反町下 堀籠 健人

この日の最後の行程は、ともに津波で多くの方が亡くなった三箇所へのお参りであった。地福寺本堂での慰霊読経の後は、町民への避難放送の最中に、三階を越す津波に吞まれた志津川の防災庁舎。鉄骨だけになった庁舎前には、誰もが立ち寄り献花供物が絶えない。私達は経本を手に、無常を説くとされる般若心経をお唱えした。そのあと石垣会長のお知り合いの地元の方からの「色んなことが思い出されるが、前を向いて生きるのがせめてもの供養」とのお話をいただき、我々は黙して頷くしかなかった。

そして最後に、旧河北町の大川小学校に到着、日没後の慰霊碑の前で再び皆で心経をお唱えした。北上川を遡った津波がここで溢れて、本当に多くの方々が流された。二年を経た今でもなお、搜索活動は続いている。この研修を終えても、沿岸部で被災された御霊を悼む私の気持ちには変わらない、折にふれてご冥福をお祈りするのが精一杯のことであると思ふ。



多くの児童が犠牲となった大川小学校にて



地元南三陸町議員の方から被災の様子を聞く

初参加の感想

大般若祈祷と坐禅会を終えて

反町上 堀籠拓也

昨年の年末に、今回初めて、大般若祈祷と坐禅会に出席させていただきました。

昨年の夏に青壮年部へ入会して初めての行事となり、こういった事をするのか全然わからず、また、どのような人達が来るのか若干不安な部分もありました。けれどみなさん何も分からない私を温かく迎えてくれ、わからないことは丁寧に教えていただきました。とても感謝しています。

坐禅会は、私が、小学校のころに一度だけ野球のスポーツ少年団の時に体験させていただいたことがあり、とても懐かしい思い出が蘇りました。その頃から約十年以上経って、いざ坐禅を組むときになって、以前は楽に組むことが出来たのが、とても辛く姿勢を正して心の精神統一をしようとしても、なかなか雑念が入り難しかったのですが、徐々に出来ていたのかなあ、と感じました。

大般若祈祷では、たくさんの和尚



降伏一切大魔最勝成就！と大声で唱えます。

様方が集まりました。それぞれ鮮やかな袈裟を着ていて、お経を読み上げるときは、とても迫力があり、驚きました。

また、寺總代の方々はお経を一緒になつて口ずさんでいて、すごいなあと感じました。

大般若經の經典は、檀家の寄付とすることを聞かされ、私の知らないところでお寺と檀家がつながっているのだと改めて思いました。

今年の年末にもまた参加させていただきたいと思います。これからもうろしくお願いいたします。

涅槃会・写経会に参加して

高田 吉川日出子

雛祭りも間近というのに、まだまだ寒さが厳しい2月17日(日)「涅槃会・写経会」の研修会を30名余りの皆様でお寺の本堂で行われました。

涅槃会とはお釈迦様の命日、(2月15日) 涅槃図を掲げての法要です。三仏忌(降誕会、成道会、涅槃会)は最も大事な仏事法要と知ることができました。

経文を姿勢正して小筆で写して
いく写経、今回で三度目の挑戦でよ
うやく落ち着いて取り組めるよう
になりました、静かな気持ちに
なります、会員の皆さま末だの方は
是非一度体験してみても如何でし
ょうか。

会ごとに住職さんの法話、坐禅があります。

坐禅はいつでも苦しいです。身を調べようとすると心が調わない、息も調わない。まだまだ無の心まではいけません。

これから、宜しくお願い致します。



涅槃図を前に参加者全員集合

一日十円募金三百六十五日達成者

高田地区
鈴木あや子様

八志田地区 堀籠京子様

ご協力ありがとうございます。



今後の行事予定

◎3月24日(日)午後4時～

春彼岸後の境内墓地清掃

◎5月19日(日)

降誕会・子育て水子地藏祭

編集後記

東日本大震災からの復興が急ピッチで進められていますが、二年目の春を迎えようとしています。

被災地を暫くぶりに訪れてみました。がまだまだ瓦礫の山でした。

被災地の皆さんの心の支えは文字で表すと「絆」ですが、さらにコミュニケーションでありスポーツであり唄であります。

スポーツ選手や芸能人の方々が被災地を巡り元氣と勇氣を与えてくれています。が心と心を繋ぐ力がそこに秘められているんですね。

写経会で筆を持ちながらふとそんな事を思いました。

広報部

部長 鵜橋初雄

副部長 佐藤 彰
部 員 小川 弘吉

浅井明美 浅野澄江
相澤敏晴

発行

禪興寺花園会青壯年部・女性部 広報部

千九八一、三六二五

宮城県黒川郡大和町吉田字長福寺二

電話番号 〇二・三四五・二〇六三